

寄稿論文

附属学校とともにある伝統が育む教育と研究

木 村 範 子*

Education and Research through Educational Tradition
with the Laboratory Schools of University of Tsukuba

Noriko KIMURA

本稿は、筑波大学とりわけ教育学系・教育学域との関わりからみた附属学校教育局と附属学校の現在の概要を述べつつ、大学が附属学校とともにある伝統の意味を歴史的に振り返り、今後の展望につながりを得ることを目的としている。具体的には、まず、筑波大学附属学校の歴史を素描し、次に、嘉納治五郎と高等師範教育に触れながら筑波大学の伝統を探り、そして、筑波大学と附属学校とのつながりの現在に触れる。こうして得られた知見より、最終的には、筑波大学が附属学校とともにあることの未来に向けての展望を述べる。

はじめに

本稿は、これまでの本学の前身からの営みも含む大学と附属学校のつながりについて、伝統を手がかりにひもとくものである。現在、筆者は、東京キャンパスの附属学校教育局に勤務している。これまでの大学改革の中で、附属学校を取り巻く厳しい風と改革のただ中に常々あり続けながらも、部局としては、附属学校とともに自ら主体的な方途を探るべく、中長期の「将来構想」を議論する場を皆で持ちながら、そのよりよい展望を模索し続けている現状にある。

自身の現在の部局のミッションである大学と附属学校の連携、そして、自身の研究領域であるカリキュラム思想史研究の立場から、さらには教職教育に携わる立場から考えていた大学と附属学校の繋がりの意味づけは、歴史的考察をベースにして、かつていくつかの論考、講演等⁽¹⁾で述べる機会を得た。当時は、大学における附属学校の役割、とりわけ、附属小学校の大学本体への貢献が求められていた時期にあり、その手がかりを筆者の研究関心から歴史的意味づけに求めたも

*筑波大学人間系（附属学校教育局勤務）

のである。大学が附属学校とともにあることの歴史的意味づけの骨子は、その頃から今も持ち続けている関心に沿っており、有形無形の学恩からの導きによるところが大きい。

本稿はその当時の論考の一部によりながら、大学とりわけ教育学系・教育学域との関わりからみた附属学校教育局と附属学校の現在の概要も述べつつ、大学が附属学校とともにある伝統の意味を歴史的に振り返り、今後の展望につながる手がかりを得たい思いのものである。

なお、本稿で取り上げる嘉納治五郎をはじめとする人物については、それぞれの人物研究として新たな知見を得るというよりは、これまでの先行研究に学びながら、附属学校とともにある伝統の歴史的意味づけを筆者なりに探りたい試みから取り上げるものである。

1. 筑波大学附属学校の歴史

本学には、明治6年東京師範学校附属小学校から始まる附属小学校、明治8年楽善会を創始とする附属視覚特別支援学校、附属聴覚支援学校、明治21年高等師範学校尋常中学科から始まる附属中学校、附属高等学校、明治41年東京高等師範校附属小学校に第三部の特別学級として設置されたことを始期とする附属大塚特別支援学校、昭和21年埼玉県入間郡坂戸町と5か村組合立学校として発足した附属坂戸高等学校、昭和22年東京農業教育専門学校附属中学校として発足した附属駒場中・高等学校、整肢療護園からの要請で附属小学校から講師を派遣し教育を開始したことを始期とする附属桐が丘特別支援学校、昭和48年国立久里浜養護学校として始まった附属久里浜特別支援学校、以上、普通附属学校5校、特別支援附属学校5校、計10校の歴史ある附属学校がある。これらの詳細は、附属学校のご協力により2007年7月に誕生した筑波大学ギャラリー「附属学校展示コーナー」における展示をご覧いただきたい。

幼児から高校生まで教育対象とし、さらにはその教育環境としての普通教育と特別支援教育の多様性・専門性は全国に類を見ず、明治以来の伝統がある本学の附属学校では、教育の専門性に裏付けられた様々な先進的な研究と実践が行われてきた。その伝統の基盤を次に探っていきたい。

2. 筑波大学の伝統—嘉納治五郎と高等師範教育—

ここでは、筑波大学の伝統を前身、高等師範学校、東京高等師範学校に大きな役割を果たした嘉納治五郎の教育観を中心に探ってみたい。

(1) 国の有りようを見つめる大所の眼差し —「世界主義」の教育観—

中野光先生によれば、1895（明治28）年、西園寺公望文相が「高等師範学校」の卒業式での祝辞で述べた「文明の進途」のための「世界主義」的立場の教育路線を拓く必要性を感じていたのが、当時の高等師範学校校長の嘉納治五郎であった。嘉納もまた、卒業生に対して我が国の富強を計るには人材の育成が急務であり、そのことは教育の方法如何によると述べたのである⁽²⁾。こうした「世界主義的」観点からの国の有りようをまで見据えた開かれた眼差しは、西園寺と同じく、嘉納においても1889（明治22）年から1891（明治24）年のパリへの留学にあったとみることができる。

阿部生雄先生⁽³⁾によれば、嘉納の大正期、講道館文化会創設のころからの「精力善用・自他共栄」の言葉の強調には、嘉納の明治期からの外遊の影響があり、特に藤堂良明先生は、嘉納の道德の立場からの〈自他共栄論〉には、特に最初の外遊で出会ったパリ大学初等教育長のフェルディナン・プイッソンと1920（大正9）年にアントワープでの第7回オリンピックで再会していることが大きな影響であり、宗教を離れて道德を説くプイッソンの交流からその後の嘉納の展開が生まれた⁽⁴⁾としていることをあげている。

(2) 主体的な高等師範学校改革と教員研修の整備

嘉納の明治中頃の高等師範学校学校長であった時期のパリ留学による「世界主義」的教育観は、後の嘉納の「大日本教育会研究組合」の改革構想にもつながっていく。この「大日本教育会研究組合」の成立によって、外国事例の紹介だけでなく、現職教員の教育方法の改良と研究情報の批評が行われ、当時の師範教育の教育研究機能を補完するとともに、嘉納においては「高等師範学校存廃問題」に高等師範学校の側からの改革の補完を意味するものであった。⁽⁵⁾

ところで「高等師範学校存廃問題」とは、1890（明治23）年以來の経費削減の時期に、一般大学で知識を習得し多少の特別教育をすれば教師になることができるという師範学校不要論である。これに対し嘉納は、「師範教育についてもっとも大切な点は、生徒をして教育の力の偉大なるものであるということの信念を確立せしむること、さらにこれを楽しむる事であるが、これは年少の頃よりこの精

神を養い、十分にこの点を理解せしめて教養するを必要とする。』⁽⁶⁾と述べ、そのための高等師範教育の必要を説いたのである。

こうした嘉納の高等師範学校の側からの主体的な改革は、今も附属学校改革論議の中で学ぶべき姿勢であり、師範教育における教員研修の意味づけは、現在の附属学校の大切な教育文化を形成し、Lesson Studyとして、我が国の教員研修モデルが世界の国々に学ばれるまでにつながっていることは興味深い。

(3) 中等教育の教員養成にありながら初等教育を重視する姿勢

ところで、我が国における附属学校は、槇山栄次(「教員養成論」昭和6年)によると、①実験学校、②一般に対する模範学校の性格のみならず、③教生に対する実習学校(練習学校)の性格を有してきた⁽⁷⁾。

中等教員養成を担ってきた本学の前身において、附属小学校の位置づけが軽んじられることがなく、むしろ、重要視されていたことは、特筆すべきことである。

1893(明治26)年高等師範学校長となった嘉納は、高等師範の特質を生かした教育強化を行い、高等師範学校附属小学校の役割を、①学生の実地練習所、②地方教員の参考のため、③高等師範学校教員の各自の研究のための三つに位置づけている。⁽⁸⁾

また、高等師範学校教授であった大瀬甚太郎も「高等の学校の教員にならんとする者でも最初の練習は小学校に於て行ふことを適当とする」とし、その理由として、小学校が、第一にすべての教授に共同である要素を最も簡単な形で持っていること、第二に教授教材が簡単であるゆえ練習を始める者には方法に全力を集められること、第三に児童の立場に身を置き、話し方等適応させる工夫を学ぶこと、第四にすべての子どもが小学校の教授を経て発達することをあげている。⁽⁹⁾ この大瀬の論文については、もう一つ重要な点がある。藤枝が、当時の普通の師範学校の附属練習学校と大学における模範(研究)学校としての練習学校との明確な区分論に言及している⁽¹⁰⁾ 観点から考察していることである。ここに見られるように、大瀬の緒論は、当時の高等師範附属小学校が模範(研究)学校として「大なる自由」が与えられていなかったゆえの自己批判を含むものであった。大瀬の理想とする高等師範学校附属小学校は「大なる自由」が与えられた究極の模範(研究)学校にあったとみることができ、その後の東京文理科大学学長兼東京高等師範学校長となる大瀬の附属学校に対する基本的な認識であったと推察されるが、このことは稿を改めることにしたい。

嘉納と大瀬、これらの緒論は、先に見たように、嘉納が年少の頃よりの教育の必要を説く中で高等師範教育の必要を説き、大瀬もまた中等教員養成において直接には関わりを持たないはずの附属小学校の重要な役割・性格づけに言及している点は注目されなくてはならない。

(4) 高等師範教育の伝統 —修養による人間形成—

師範学校の特質を端的に表しているのが、次に見る当時の文部大臣森有礼に対する嘉納の批判である。嘉納は、師範教育に「順良・信愛・威重」を主張し兵式体操を導入した当時の森文部大臣に「魂を入れて形を作るのはよいが、形ばかり作って魂をいれなくては何の役にもたたない」と述べ、「行う方法が的を得ていない」と批判し、「師範教育にもっとも必要なるは教育の力の偉大なることを理解し、教育の事業の楽しきことを知り、かりに外面からうける待遇が肉体的にも精神的にも十分でないとしても、教育事業そのものを楽しんで職にあたる。これが教育者の魂である。この魂を養うことが教員養成の第一である。」と述べている。そして、「威重」については、「おのれ自身が価値あることを自覚し、自己が責任ある位置にあることを自覚してはじめて威重は教えずして備わるもの」であり、「信愛」については、「人を信愛して自ら満足し得るような深き遠き思慮をやしなうという根本的素養に基づかずしては人を信愛し得ない」とした。「順良」については、「いたずらに人と争い、いたずらに自ら高ぶることが自己の価値を高め、自己の目的を達するゆえんではない。長上には不必要にさからわず、自らへりくだり、控目にすることがかえって己を高むるゆえんであることを了解せしむれば人は順良となる。ただ順良になれと強うるときはかえってこれにそむき、また卑屈となり、正当に反対し、抗議すべき場合にも尻込みする癖に陥るであらう。」⁽¹¹⁾と述べている。

こうした嘉納の説く教育者「精神」は、教え込んで身につけさせるべきものではなく、教育者としての自らの修養によるべきものであると説いたのである。この修養主義は、師範教育の強さでもあり、また時に弱さでもあることは、後の混迷の歴史に見ることができるが、嘉納が築いた教育者の使命に基づく高等師範教育の伝統は、混迷ではなくむしろ師範教育の特質そのものを形成する礎にしっかりと根づき、今を支える基盤になっていることは積極的に評価しておきたい。

(5) 繋がりがつくる学校文化

嘉納治五郎の教育は、樋口勘次郎、棚橋源太郎の附属小学校での教育実践となって開花する。先の西園寺と嘉納の「高等師範学校」の卒業式での「世界主義」的祝辞を卒業生として聞いていたのが、樋口勘次郎、棚橋源太郎であった。⁽¹²⁾ 師から愛弟子へ、高等師範学校で実践的に身につけた精神は、母校の附属小学校の教育に引き継がれていったのである。

附属中・高等学校の同窓会誌には次のように述べられた生徒の文章がある。「(前略) 我々の今日あるは全く附属中学校のお陰だが、附属中学校の今日あるは抑も第一回以来の先生方と生徒たちとの理想的な共同生活の結果である。『我等が附属を作り、附属が我らを作った』のだ。」「⁽¹³⁾ こうして附属学校の自由と自治の風土に満ちた学校文化は、歴史的伝統に支えられ、文化を自ら耕す教師と生徒によって引き継がれていったのである。

3. 大学と附属学校の繋がり の 現在

ここでは、大学と附属学校の共同研究と共同事業を中心にそのつながりの現在を概観しておきたい。ここで取り上げる事項は、特に教育分野に関わりのある筆者の赴任前後の時期からの一部のものであり、すべてのものではないことはご了承ください。

〈教育学系と東京地区学校教育部、附属学校の共同研究〉

教育学系長山口満先生の時に下記のような附属学校の在り方に関する研究会がもたれ、東京地区学校教育部金子守先生の一貫性のプロジェクト研究も行われ、それらが基盤となって、教育学系長桑原隆先生の時に科研費研究につながっていった。

- ①筑波大学学内プロジェクト研究助成研究 (B)「小・中・高等学校の一貫性の在り方に関する基礎的研究」平成 9～11 年度（研究代表者：平成 9 年～10 年度 山口満先生・平成 11 年度 長洲南海男先生）
- ②筑波大学学校教育部プロジェクト研究「附属学校における一貫性に関する実際的研究」平成 13 年度（研究代表者：金子守先生）
- ③文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (B) (2)「小・中・高一貫制にもとづく教科・教科外のカリキュラム開発研究」平成 15～17 年度（研究代表者：桑原隆先生）教育学系 15 名、人文社会学系 2 名、体育科学系 1 名、附属小・中・

高全教員

この科研費研究では教科・教科外・カリキュラム・方法に関わる教育学系の多くの先生方と、英語は人文社会学系、体育は体育科学系の先生方、大塚地区小・中・高のすべての先生方とその研究組織である「四校研」(大塚地区附属小・中・高と大学との合同研究会)とも連携し、一貫制の教育をカリキュラム研究の側面から明らかにする研究が行われた。

この共同研究が契機になって、附属学校の四校研の研究は一貫教育の軸のもとに、小・中・高の算数・数学、体育、家庭科等で合同授業も行われるようになり、児童生徒の発達段階をふまえた一貫教育のカリキュラムや指導法の研究が進められるようになり、今日に至っている。

〈附属学校教育局のプロジェクト研究〉

東京キャンパス附属学校教育局には、現在、心理(3名)・障害科学(4名:うち2名は特別支援学校校長兼務)・教育(1名)の各専門分野の大学教員と特教育次長(1名)・教育長補佐(2名)の教員がおり、それぞれの分野からの附属学校との共同研究が行われている。教育分野では、次のような共同研究が行われ、大学研究センターを含む多くの教育学系・教育学域の先生方の支えによって、附属学校の先生方との共同研究が行われた。研究はその時々々の附属学校の現場ニーズや附属学校が抱える実践的課題に即したテーマを担当教員の専門性と関連させつつ設定されている。

- ①「筑波大学および附属学校における教職教育の在り方の研究」平成13～15年度(研究代表者:金子守先生)附属学校13名、教育学系3名、体育科学系1名、参加
- ②「発達段階に応じた情報教育のカリキュラム研究」平成14～16年度(研究代表者:服部次郎先生)附属学校15名、教育学系2名、参加
- ③「附属学校におけるカリキュラム開発に関する実際的研究」平成14～16年度(研究代表者:江口勇治先生・飯田範子)附属学校13名、教育学系5名、RA教育学研究科院生2名、参加
- ④「筑波大学及び附属学校における教職教育の在り方の研究」平成16～18年度(研究代表者:江口勇治先生)附属学校19名、教育学系4名、体育科学系1名、参加
- ⑤「附属学校の「知」を活かした教師教育の創造—教師教育のカリキュラム開発

と授業モデルの構築―」平成 19 ～ 22 年度（研究代表者：木村範子）附属学校 25 名，教育学系 7 名，体育科学系 3 名，参加

- ⑥「附属学校における卓越した指導力を活かした教師教育のカリキュラム開発」平成 23 ～ 25 年度（研究代表者：木村範子）附属学校 20 名，教育学系 8 名，体育科学系 2 名，参加

〈大学・附属学校連携委員会，連携小委員会，「四校研」〉

大学と附属学校の連携については，法人化以降，附属学校教育局に設置されている「大学・附属学校連携委員会」が全体調整機能を持ち，附属学校の各校には日常の連携を推進する「連携小委員会」が設置されている。これらの委員会には，附属学校教育局だけでなく，大学の関係組織の大学教員が関わり，附属学校の先生方とともに研究や教育事業が進められている。「四校研」については，教育学域の主として各教科の先生方がメンバーに加わり，『四校研活動報告』としてはほぼ 3 年ごとに報告書にまとめられている。

〈センターとの共同研修事業〉

- ①「日本の教育経験における情報整備事業―教育経営・教員研修分野を中心にして―」平成 15 ～ 17 年度拠点システム構築委託事業（研究代表者：佐藤真理子先生）

この研究で作成された『日本の教育制度と教育実践―研修のためのビジュアル教材―』（筑波大学教育開発国際協力研究センター）は，その後の JICA，途上国支援教育等，グローバルな教員研修の講義・演習にもつながり，附属学校の参観を通じた教員研修として現在も実施されている。

〈筑波大学の全体からの附属学校のミッション〉

最近の状況は，筑波大学の全体のミッションに鑑みた附属学校のミッションを附属学校が協働して，教育事業として行うことがウェイトを占めるようになっていく。

大学のグローバル戦略に鑑みた附属学校のグローバル教育の推進では，附属坂戸高等学校の IB 教育の導入・推進と SGH，附属高等学校の SGH があり，国の施策に鑑みた附属駒場中・高等学校の SSH，国際協働プログラムや現在の WWL 事業等があげられる。

また，附属学校の中期目標・中期計画では，グローバル人材の育成とダイバーシティの 2 つのミッションを大きな柱に行われている。現在，「四校研」の研究

の柱は、一貫グローバル研究、特別支援学校は、普通附属と特別支援附属との共同交流事業を行っている。

〈附属学校教員の大学との人事交流〉

附属学校との共同事業を進める上で、副学長兼附属学校教育局教育長谷川彰英先生の時から始まった大学と附属学校の人事交流も大きな役割を果たしている。附属学校から体育科学系へ（1名）、附属学校管理職経験者から附属学校教育局教育次長や教育長補佐への交流人事である。附属学校の実態をよく知る附属学校管理職経験者が、附属学校の教育事業の実務的中核を担うとともに、附属学校の危機管理対応の窓口・相談役ともなり、附属学校と大学を結ぶ架け橋となっている。

〈教員研修事業、「科学の芽」賞〉

附属学校教育局は、附属学校教員の法定研修を担うとともに、「教員免許更新講習」では、筑波モデルともいうべき附属学校発の教員研修を行って成果を上げている。「科学の芽」賞は、2006年朝永振一郎博士生誕100年記念事業・青少年プログラムの一環として開始され、附属学校の理科担当の先生方と全学組織の先生方、教育学域では理科教育コースの先生方と院生のご協力をいただき現在に至っている。附属学校発の教員研修と「科学の芽」賞の始まりには、筑波大学駒場中・高等学校の副校長経験者の小林汎先生、また、附属学校の国際教育拠点事業の始まりには、附属小学校の副校長経験者の坪田耕三先生のご尽力によるところが大きく、事務方の全面的なバックアップのもとに現在のメンバーに引き継がれ、進められている。

おわりに

最後に、附属学校とともにあることの未来にむけて若干の課題と展望を述べておきたい。

第一に、今後の筑波大学附属学校ならではの有りようを模索する上で、本学の附属学校における学校文化の特徴を述べるならば、地方ではなく、都市にあり、近代の都市文化の形成とともにあった本附属学校の学校文化の形成の独自性をあげることができる。都市教育の問題が論じられた時期に湯原元一は、都市教育の批判だけではなく、都市教育の有効性の観点からも論じた⁽¹⁴⁾が、再びそこから筑波大学附属学校ならではの有りようを模索し、今日的意義を論ずる手がかりを得

ることも必要となろう。別の機会としたい。

第二に、かつて嘉納が、「師範学校不必要論に対する反駁」において、不必要論は「往々にして経済論からくる議論」と断言し、どんなに非難があろうとも師範教育の良さを説くことに全身全霊を注ぎ、教育の精神を世界主義的観点から使命といえるまでのものにまでつながるものとして構想していたことから、今も学ぶべき点が多い。現在の常に改革が求められている大学と附属学校の議論のただ中にありつつも、目先に惑わされず、大所を見定め、主体的な自己改革をうちに含みつつ、教育の使命とは何かを常に模索しつづけることにこそ本筋があるといえるだろう。

第三に、中等教員養成における小学校の意義を積極的にとらえてきた高等師範学校の伝統は、教育学系・教育学域の先生方をはじめ附属学校の先生方のご尽力によって今日の小学校教員養成課程成立につながった。嘉納や大瀬によるように、中等教員養成における初等教育に学ぶ姿勢やその逆など、相互の交流と児童生徒の教育を一貫して学ぶことができる教員養成カリキュラムの構築も今後重要となろう。

第四に、教職は本学の前身からの重要な柱である。しかしながら、その志望者の減少傾向にある現在に求められることは何か。筆者が院生のころ長谷川栄先生代表の科研費研究「総合大学における教職教育のプログラム開発に関する実証的研究」中間報告書の中で佐藤三郎先生が最後にまとめられた次の言葉が響く。「18歳人口は平成4年度をピークに、その後は減少するだけになる。(中略)そのような時代を前に、もし本学がこれに適った道を探るとしたら、そのひとつは、人間に対する深い理解と認識に立って、「教育」の観点を常にふまえた卒業生を社会に送り出すことだと思う。これからは学校教員であるなしにかかわらず、公務員になるにも、企業人としても、さらには研究者であっても、この観点はすべての職業、あらゆる生活場面で、ますます必要かつ重要となるからだ。それはまた、本学が現有する人的・物的諸条件を有効に活用し、過去の歴史と伝統とを新しい形で未来に生かしていく最も手近で、最も容易な、しかもそれでいて将来性のある、最も賢明な選択肢であるように思われる。」

嘉納の「教育を楽しみとする」精神は、時代を超え、今も筑波大学附属学校とともにある伝統に精神として宿り続けている。現在の改革の厳しいただ中であっても、児童生徒とともにあり、児童生徒のためであればどんな苦難も乗り越えら

れる教師の本性に最大限の敬愛をもって、寄り添い続けることが、今こそ求められていることのように思えてならない。

註

- (1) 木村（飯田）範子『『学ぶ力』を育てる家庭科のエートス—戦後初期附属小学校の赤井（平山）チサト実践にみる—』『教育研究』No.1258, 初等教育研究会, 22-25 頁。
木村範子「附属学校の歴史と伝統」筑波大学 大学・附属学校研究発表会, 2007 年。
木村範子「附属学校の深遠」茨城県立並木中学校出前授業, 2007 年。
木村範子「教育と研究の伝統がつなぐ未来—附属学校とともにあることの意味—」『筑波フォーラム』80 号, 筑波大学, 2008 年, 43-45 頁。
- (2) 中野光『学校改革の史的原像—「大正自由教育」の系譜をたどって—』黎明書房, 2008 年, 18-19 頁。
- (3) 阿部生雄「嘉納治五郎とピエール・ド・クーベルタン—「精力善用・自他共栄」とオリンピックズム—」『筑波大学体育科学系紀要』第 32 巻, 2009 年, 1-7 頁。
- (4) 藤堂（藤堂良明『柔道の歴史と文化』不味堂, 2007 年, 164-165 頁）については、阿部の前掲論文, 6-7 頁による。
- (5) 白石崇人「明治 20 年代後半における大日本教育会研究組合の成立」『教育学研究』第 75 巻第 3 号, 2008 年, 263-275 頁
- (6) 嘉納治五郎「師範学校不必要論に対する反駁」『嘉納治五郎著作集 第三巻』五月書房, 1983 年, 261-264 頁
- (7) 藤枝静正『国立大学附属学校の研究—制度的考察による「再生」への展望—』風間書房, 1996 年, 3 頁
- (8) 嘉納治五郎「我が附属小学校に就きて」『教育学術界』臨時増刊第 7 巻第 1 号, 1903 年, 4-6 頁
- (9) 大瀬甚太郎「附属小学校の性質」『教育学術界』臨時増刊第 7 巻第 1 号, 1903 年, 6-13 頁
- (10) 藤枝は、前掲 (8) 嘉納論文は取り上げていないが、前掲 (9) 大瀬論文については、普通の師範学校の附属練習学校と大学における模範（研究）学校としての練習学校との明確な区分論の観点から取り上げている。（藤枝 同上書, 53-54 頁）
- (11) 嘉納治五郎「森文部大臣の行政を批判す」『嘉納治五郎著作集 第三巻』五月書房, 1983 年, 233-235 頁
- (12) 中野, 前掲書 (2), 20-32 頁
- (13) 穂積重遠「我等と附属」桐蔭會雜誌 104 号, 1936 年（「桐蔭」刊行委員会編『桐蔭』1984 年, 29 頁所収）
- (14) 飯田範子「「都市教育」という視点の登場—湯原元一著『都市教育論』を手がかりとして—」中井孝章編著『子どもたちの生活世界』日本教育研究センター, 2005 年 175-186 頁

謝辞：これまでの教育と研究を支えて下さった附属学校教育局と大学研究センターの東京キャンパスの先生方，教育学系・教育学域の先生方，附属学校の先生方，先輩方，そして恩師，学恩に心より感謝申し上げます。